

# 西真寺 寺報

令和元年 秋号

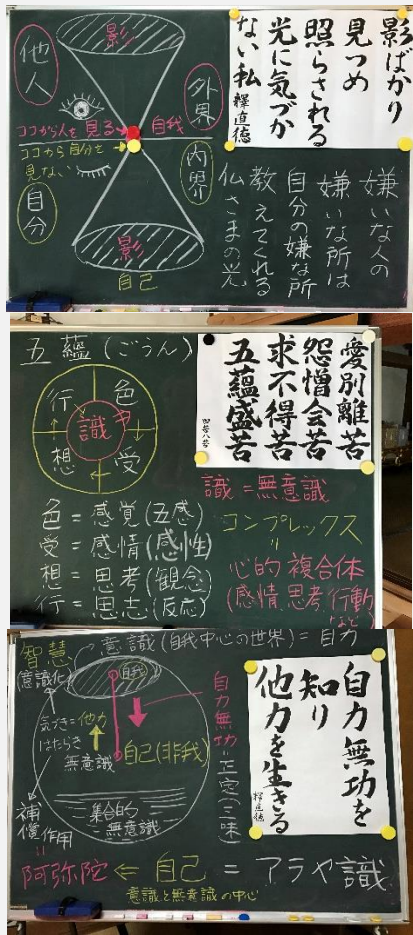
## 住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

西真寺には、伝道掲示板がないため、定期的に本堂の中にある黒板に、その都度思い付いた標語を掲示しております。これまでに、私が領解した自分の言葉以外にも、私が尊敬する方々の標語や法語を掲示し、春と秋のお彼岸やお盆、法事等でお参りに来ていただいたご門徒さん中心に発信しておりました。

加えて、ホームページやフェイスブックなどのSNS（ネットを介して人間関係を構築可能にするサービス）に投稿してまいります。しかし、これまでの寺報には、伝道標語について、まったく取り上げておりません。今後は、伝道掲示板、SNS、寺報を通じて、近い将来、皆さんのご指導を賜りながらこの標語が遺墨として残れるように熟考を重ねてまいります。南無阿弥陀仏

釋直徳



### ■影を内に観るか外に観るか③ 2. 投影の種類

ユングは、個人の無意識より深い領域にはたらく普遍的かつ集合的な無意識を構造的に捉えました。その上で、この領域に最初から備わる本能的な根本原理を「元型」と考え、いくつかの元型的概念を発見しました。それらの元型的イメージの投影は次のようになります。

- ① 影、闇の投影
- ② 英雄像の投影
- ③ 聖者像の投影
- ④ 異性像の投影
- ⑤ 父母像の投影

このように元型がもたらす投影のイメージには、肯定と否定の側面あるいは陰と陽の側面などの対立した像が併有しており、陰の側面には、影や闇、死や悪のイメージがあり、一方には陽の側面として、光や善、生における英雄や聖者の象徴的な像があります。ユングの元型論における両価性（同一の対象に対して相反する感情や態度…可愛さ余って憎さ百倍等）は、クライン、≡の「妄想—分裂ポジション」で示される両価性や二分性と非常に似ています。

ユングは、この他に異性像や父なるもの、母なるものなどの元型的なイメージにもポジティブな側面とネガティブな側面の両価性があることを述べています。

これらの概念には昔話や神話に共通する傾向的パターンがあるとして説明されていますが、近代における現象としては、ゲルマンの民族の背景に生じたナチスドイツの台頭が挙げられます。

そこには、ヴォータンというゲルマン民族の英雄的な神の象徴たる元型がドイツ民族に取り入れられ、同一化されたという事象があるでしょう。

第二次世界大戦前、経済的に疲弊し、不安がつのる情勢に置かれたドイツ人は、ヒットラーにその打開策や願望を込めたのです。そして無意識に英雄像と聖者像のイメージをヒットラーに映し出し、あるいは、自分には出来ない過度な理想的なイメージを蓄積した元型によるはたらきが、ファシズムを生んだのです。この場合の投影は、理想化された対象に自己の良い部分を取り入れられ、同一化することで、熱狂的なファシズムが生まれます。

我々日本民族においては、ドイツ同様の全体主義から、英雄像と聖者像の典型的なはたらきにより、戦争を経験しています。しかし、ドイツとは異なり、日本民族固有の投影による両価性から生じる、淨穢観念によるアジアに対する独善的な排他性が強く反映されていると考えられます。

我々が古来持ち続けている宗教観念には、穢れ意識があり、『古事記』の神話にあるイザナギとイザナミに見られる穢れた死骸と黄泉の国のイメージがその原点になります。ここで表現される死は、汚く恐ろしいウジと膿にまみれた死であり、恐怖から、死と穢れに対する排他性が見うけられ、死の国から逃げ帰って行う清めの儀礼は、淨と穢れとの両価性や呪術性、忘却性が見てとれるのです。

さらにイザナギがイザナミに追われて逃げる際、モモをイザナミに向かつて投げつけ、「私はおまえの国の人間を一日に千人殺す」というイザナミに対するイザナギの言葉は「ならば、私は一日に千五百の産屋を立てる」であることから、優位性や独善性が生まれています。

イザナギは、自らの死と影をイザナミに投影し、真実を封印し、現在の生き方を見逃しているのです。

この神話における原初的傾向イメージの手続き、換言すれば淨穢元型的イメージのはたらきにより分裂し、過度に理想化された英雄像や聖者像と一体化、権威化された対象が、天皇像であると言えるのです。

(次号に続く)

### ■神道と仏教の関係③ 3. 万世一系の二分性

松村武雄は、『日本神話の研究 第一巻』の中で記紀『古事記』と『日本書紀』の神話群は、説話が空間的に横に展開するものでなく時間的に縦に流動し、物語が世代化され人代巻に及び、その主役は神と言いながらも**人間的首長の特色があり、皇室の系譜に連なっていること**が日本神話の独自性であるとし、松前建もこれを適切な指摘としています。ここでは、国家権力を神聖化する過程とその背後にある思想を取り上げていきます。

金岡秀友は、インドのバラモンの司祭階級にある「アーリアの純粋性」と日本における皇族の血脈の優位性にある類似を指摘しています。

また、東洋文明における二分性の原初について、「西北方からインド亜大陸に侵入したアーリア人は、先住文化の保持者であるインダス文明人や先住民であるトラヴィダ人と覇を競い、紀元前一二〇〇年頃にはインド西北部のパンジャーブ地方に定住したと考えられる。この時に生じた征服民と被征服民の関係が、のちのカースト制度における上位三階級（アーリア、再生族）と下位のシュードラ（非アーリア、一生族）という区分を生むに至る最大の原因であった（中略）当時にあつてはまだカーストは四分されるに至らず、自由民（arya-vamsa）と隸

民 (dasa-yamasa) に二分されていた」と明らかにしています。

このように、もともと肉食を主としていた遊牧民アーリア人は、支配力を強化しその聖性を高めるために、肉食主義となり、牛をシンボルとして、その屠畜を禁止し、肉食を禁忌化して自らを神格化していたのです。

「聖なるもの」を名のつた征服者は、性交・死・出産・経血・排泄行為という生命現象に対し、「穢れ」として排除し、宗教的教義に基づくイデオロギー（社会に及ぼす支配的観念）として操作したのです。

また沖浦和光によれば、日本における身分差別の源流として古代の隋・唐より導入された《貴・賤》観と中世のバラモン教的（現代インドのヒンドゥー教）な《浄・穢》観により中世的身分観念が定立されていることを述べています。その特徴について、釈迦仏教の教義を喪失していく過程（退化）で生じたイデオロギーであり、宗教的な姿をした正当性と血統性に基づくカリスマ的支配の永続性として論じています。

そして、後者が日本に入ってくる過程における媒体として、バラモンの祭式主義を基本とする密教を挙げています。次に密教が成立した過程を説明します。

原始仏教は、呪いや占いは禁じており、あくまでも修行を重視していましたが、仏教が民衆に広まるにつれて民間信仰に根強くあった祈願・招福・徐災を重んじるバラモン教やヒンドゥー教と妥協すること、密教を成立させたのです。この為、密教では「陀羅尼（呪文）」を唱えており、道慈が舶載した『金光明最勝王経』全体にわたり「陀羅尼」の涌出が30数種に及んでいるのです。

つまり、古代における日本は中央の大和政権に対し、地方の豪族が勢

力を持ち、渡来系出雲王国（スサノヲ・秦氏）の台頭を抑え込む必要性から、渡来民族が持ち込んだ仏教思想と中国神話を編纂し、これをイデオロギー化することで統治を進めていった経緯があるという事です。神話で形成された統治を確実に永続させる為に古代インドで生まれた「浄・穢」の二分性と中国で培われた「貴・賤」の二分による優位性を利用したのです。

このように、万世一系の皇祖による国土創生神話は、古代インドにおいて自らを高貴な人と称したアーリア人の侵略制圧と『ヴェーダ』聖典にある祭式主義と同様、武力によって征服した天武天皇の指示により、巧妙に作られた差別的身分制の正当性を誇示するための虚構であることは既に知られている史実なのです。

日本神話の優位性について武光誠は「このような話を通じて、朝廷は死は穢れたものだと主張し、死すべき運命をもつ出雲の神々を格の低いものとした。それによって、高天原の神々や中央豪族の優位が説かれることになる」と的確に述べており、日本神話におけるイデオロギー的操作は、インド仏教以前のバラモンによる祭式主義に類似していることがここでも確認できます。

日本神話における浄なるものと貴なるものの優位性は、神話の中のイザナギとイザナミの物語に表現されています。我々が古来持ち続けている記号化された宗教観念には、「内在化」された「穢れ意識」があるのです。

「黄泉の国」で表現される死は、別項『影を内に観るか外に観るか』③で述べた通り、汚く恐ろしいウジと膿にまみれた死であり、死と穢

れに対する排他性が見うけられ、死の国から逃げ帰ってイザナギが行う清めの儀礼には《穢悪》観念が見て取れます。

征服王・天武天皇によつて編纂を命じられた、『古事記』の神話にあるイザナギとイザナミに見られる穢れた死骸と黄泉の国のイメージがこの意識の原初に当たります。しかし、この話は日本特有の話ではありません。

大林太良の研究によれば、中国の伝承にある林蘭の『金田鶏』（金の蛙）に載った三宮の話では、イザナミとイザナギの神話と奇妙に類似していることが指摘されています。

この話が『西遊記』の第九回の筋をそのまま利用した玄奘法師の両親の話であることから、日本の王権神話に伴う〈日本人の原罪〉である《穢悪》観念が、仏教の源流から分化し、発達していることが窺えるのです。

そもそもこうした「記紀神話」自体は7〜8世紀に形成され、仏教や中国文化の影響を受けた唐からの留学僧であった道慈が関わり、〈日本人の原罪〉を策略したのです。

死、穢、悪の対極の生・浄・善であるイザナギは、「人間の神化」に相当し、仏教伝来の影響により一つの神の個性として明確に「蕃神化」したもので、創作した「記紀神話」にある神の形成像があります。

この原初的傾向イメージの手續き、すなわち穢れたイメージを排除し、英雄像と聖者像を投影し、神聖化、権威化されたのが万世一系の天皇像なのです。つまりこの**虚構(戯論)**が**現神(あらかみ)を生んだ**のです。

河合隼雄も指摘していますが、私達日本人は、善悪より浄穢の判断が優先され、清らかなものは善であり、穢れたものは悪となるという無

意識的な構造をもたらし、宗教的な美意識概念として、また死生観となり私達の民族性の根本意識を成立させてきたのです。

私達日本人は、神聖された天皇、つまり現神が人間に変化した戦後以降、浄化された英雄像のイメージを投影し、悪や穢れを排除し、その場しのぎの正義を工作し、善人として一時的な安心を得ている心理構造を維持しています。

世の中が不安定になればなるほどこの心理構造が求められ、強化される結果、戦争が生じる真実は、歴史が明らかにしている通りです。

織田尚生が、「投影は依然として続く。われわれの心は深層の中心を投影する対象を求めている。その対象が地上の王でなければ、それに代わるものを探し続けるだろう」と論じていることは大変興味深い普遍的な視点であります。 本荘 直広(次号に続く)

#### ■編集後記

六月十八日の山形県沖の地震は、五十五年前の新潟地震を彷彿させるような揺れを感じたことと思います。私自身、東北大震災の際に新潟市で震度四度程の長い揺れを経験しましたが、今回の揺れよりも恐ろしく強く感じました。新潟地震の震源は粟島沖であり、その当時の新潟市の液状化による被害に比べ、村上は地盤が固く被害も少なかったときいております。西真寺におけるこの度の地震による被害は、本堂、庫裏、墓地においても、瓦や壁の損傷やひび割れなど一切ありませんでした。昨年地震保険に加入しておりましたので、落ち着いて揺れが終わるのを待つことが出来ました。皆さんのおかげ様で、有難いです。 合掌

#### ■西真寺 行事のご案内

夏のお寺の集い(P.T.A行事) 七月二十七日、二十八日(土日)

竹灯籠祭り 十月十二日、十三日(土日)

報恩講 十月十三日(日曜日)

京都本山参詣旅行 十月十六日から二泊三日(水木金)